

狂言：配役決定！（6年生）

9月29日（金）に、6年生は、狂言の2つの演目である『附子』と『柿山伏』の配役を、自分たちで決定しました。

6年生は、1学期後半から『附子』と『柿山伏』『猿唄』の読み合わせを始め、それぞれの演目がどのようなストーリーなのかをイメージしながら、自分だったらどの場面を演じたいか等、演じ手としてのイメージも持てるようになっていました。

平荘狂言は、今年度が最終年となります。今年は、23年間続けてきた『平荘狂言』の集大成の年です。33名の子どもたちが、自分たちらしい狂言に仕上げたいと願っていることと楽しみにしています。

平荘狂言は、リレー式で行うのが特徴です。『附子』であれば、「主人」「太郎冠者」「次郎冠者」の3人の役を「主人①」「主人②」・・・というように、演じ手が交代しながら1つの役を演じていきます。チームワークがとても重要になります。「太郎冠者①」の役の中での体験や心の動きを知らずして「太郎冠者②」を演じることはできません。演じ手は交代しても、「太郎冠者」という役はそのまま演じ続けなければならないからです。

子どもたちは、自分の稽古だけではなく、友だちの稽古もあわせて理解していないと、観客に伝えたい内容が届きません。『附子』チーム、そして、『柿山伏』チームのチームワークの強さで仕上げられ具合が変わってきます。

狂言学習を通じて、「ことばの力」「表現力」「最後までやり遂げる力」「想像力・工夫」「協力する心（チームワーク・仲間意識）」「根気」等、子どもたちのもっている多くの力が伸びることと思います。

11月23日の平荘小学校最後の狂言発表会後の、6年生の子どもたちの達成感・充実感を信じて、狂言学習をスタートします。



『狂言』とは・・・



「能」と「狂言」は、今からおよそ650年ほど前の室町時代に誕生した芸能です。

『能』と『狂言』ともに、日本の伝統芸能の一つで、ユネスコ世界無形文化遺産に登録されています。

『狂言』は、多くの民衆によって受け継がれてきたものです。

私たちの日常生活の中で馴染みのある「上手・下手」「ノリがいい」「埒（らち）があかない」「打合わせ」等の言葉は、能楽（「能」「狂言」）からきています。

『狂言』は、中世の庶民の日常生活を明るく描いた、セリフが中心の喜劇です。能と異なり、ほとんどは面をつけずに演じられ、笑いを通して人間の普遍的なおかしさを描きだします。



《山口先生のお話より》

狂言は、何と！650年続いている芸能です。おもしろくなかったら続きません。おもしろくなかったらたちまち消えるのが芸能の世界です。だからこそ、魅力があるのです。稽古しながら作っていくのです。世界各地に芸能があります。芸能は、人々の生活の中で、大事にされてきています。狂言は、形を変えずに続いている（650年）世界最古の芸能です。途中、江戸時代に、歌舞伎として形を変えて枝分かれをしました。日本語は言葉の数が多く、同音異義語があり、ことばの芸能が生まれやすいのが日本語です。

【学校だより『いなほ』R4年10月31日号】

『能』と『狂言』の違いは、「能」は歴史上の人物や物語を題材にした悲劇が多いのに対して、「狂言」は庶民の日常生活を面白おかしく描く喜劇です。

また、『能』は面をつけ「そろろう調」の言葉で演じられますが、「狂言」は面をつけず、主に素顔で「ござる調」を使った言葉でわかりやすく演じられます。

9月29日は、『中秋の名月』

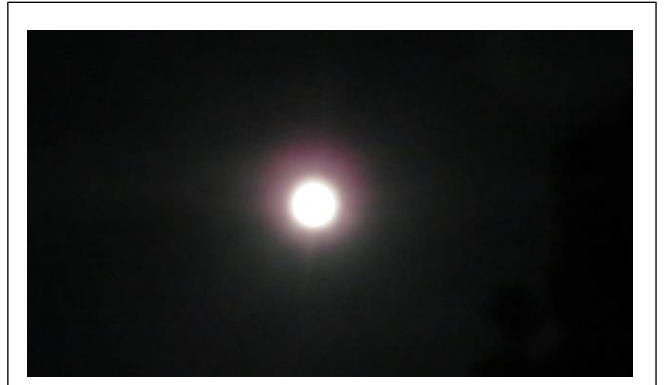
2023年の中秋の名月は、9月29日でした。太陰太陽暦の8月15日（明治5年まで日本で使われていた暦のこと：月の満ち欠けを元に日付が決められていました）の夜に見える月のことを指します。中秋の名月をめぐる習慣は、平安時代に中国から伝わったと言われています。日本では、中秋の名月は農業の行事と結びつき、『芋名月』とも呼ばれることがあります。

また、太陰太陽暦の9月13日の夜を『十三夜』と呼び、日本ではその夜にもお月見をする習慣があります。十三夜は、『後（のち）の月』『豆名月』『栗名月』とも呼ばれます。今年の十三夜は、10月27日です。

いぶき・わかば学級の子どもたちが お団子づくりに挑戦

9月26日（火）に、いぶき・わかば学級の子どもたちが、お月見団子づくりに挑戦しました。

最初に、『中秋の名月』について学習してから、お団子づくりをしました。材料は、白玉粉と豆腐です。豆腐を使うことで、柔らかいお団子ができるそうです。



夕しは、砂糖と醤油と片栗粉を使って作ったそうです。柔らかくてとてもおいしいお団子が出来ました。